

保幼小連携を進めていくために

* 学びのスタイルのちがいと連続性

幼児教育のいわゆる「遊びを通して行う教育」。系統的なカリキュラムに沿った小学校教育。こうした学びの違いはあっても、楽しいもの・未知なるものを追求し解決していこうとする子どもの姿は共通しています。幼児期から児童期への学びには、「幼児期：学びの芽生え」→「児童期：自覚的な学び」という連続性があります。

こうした両者の違いと、その連続性を知って、初めて効果的な保幼小連携の実践に取り組むことが出来ます。

* 連携を進めるための留意点

以下の留意点を参考に、連携に取り組みましょう。

1 既存のカリキュラムで無理なくできるところから

例えば、サツマイモの栽培は、小学校生活科の時間によく行われており、保育所（園）や幼稚園でも日常的に見られる活動です。

2 互惠性のある活動をつくる

小学校生活科の学校探検に幼児も一緒に活動すれば、幼児の小学校への期待感を高めると同時に、小学生の自覚を促し規範意識や自己肯定感を高めることにも繋がります。

3 交流後の話し合いを大切にする

交流活動で、それぞれの子どもたちにどのような学びや育ちがあったかを話し合い、相互理解を深めることで、次の活動に繋がります。



保幼小連携にむけて

北九州市保幼小連携推進連絡協議会会員
鳴門教育大学 大学院教授

木下 光二 先生

連携推進プログラムも、「知る」から「学ぶ」へとステップアップです。日本はもとより世界の教育に影響を与えているOECDは、国際標準の新しい学力観の1つとして、「異なる集団で交わる力」を挙げています。関係性の希薄化が今日的教育課題となっている日本においては、今まさに他と交わること、関係性をつくることが求められており、連携の推進は、幼児期から児童期にかけて子どもたちに交わる力を育んでくれると考えます。

連携教育は、子どもたちはもとより、教師自身の教育観や教育理念にも新しい変革をもたらしてくれることになります。保幼小で「学ぶ」ための場づくりは、両者に有意味であることを信じ、1歩ずつ着実に進んでいきたいものです。




保幼小連携担当者の役割について


保幼小の連携をこれから始める場合でも、さらに進めていく上でも、相互理解や情報を共有することは、とても大切です。


そのためのキーパーソンとして、平成24年度「保幼小連携担当者」を保育所（園）、幼稚園、小学校のそれぞれで決めていただきました。

連携担当者の皆さんが、まずは個人レベルで良きパートナーとなり、それぞれの地域で無理のない連携に取り組みましょう。

* 連携担当者のチェックボックス

- 連携担当者の名簿を見てみましょう。自分の地域にどれだけ保育所（園）、幼稚園、小学校があるか分かりますか。
- 担当者同士で連絡を取り合ってみましょう。

まずアクションを！
- 実際に会って、情報の交換を試みましょう。

互いに知り合う！
- 打ち合わせを定期的の実施しましょう。
- それぞれの小学校、園など組織全体で、情報を共有しましょう。
- お互いの行事への参加など連携（交流）活動を始めてみましょう。
- それぞれの連携（交流）活動を、お互いの年間計画へ位置づけましょう。
- 交流活動・計画を振り返ってみましょう。

継続のために！

* みんなで一緒に連携に取り組んでください。

保幼小の連携のためにキーパーソンの存在は、とても重要です。

でも、実際の連携は、保育所（園）、幼稚園、小学校の子どもたち、先生たちがみんなで取り組むことが大切です。組織全体での情報の共有化や取組みに、ご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。